

研究員 の眼

超高齢社会における戦略の欠如

生活研究部 准主任研究員 前田 展弘
(東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員)
(03)3512-1815 maeda@nli-research.co.jp

昨年来のアベノミクスの取組みにより、日本社会は活気を取り戻しつつある。大胆な金融政策（第一の矢）、機動的な財政政策（第二の矢）、新たな成長戦略（第三の矢）と、矢継ぎ早に展開された取組みは、国民及び市場の「期待感」を高めることに成功した。国民としては、迎えた2014年度、この「期待」を肌で「実感」できる社会の前進が期待される場所である。

この前進の鍵を握るのが、第三の矢である「成長戦略」であろう。これまで「日本再興戦略」（2013年6月）をもとに、「日本産業再興プラン」、「戦略市場創造プラン」、「国際展開戦略」が推し進められてきたが、まだまだこれからの状況にある。本戦略は、今後も進捗を見ながらブラッシュアップされていく予定であり、現時点でとやかく述べることは拙速な感があるが、一つ決定的に不足している「視点」がある。それは「高齢化への対応」である。政策担当者からすれば、「何を言っている、十分対応している」と反論をいただきそうであるが、筆者からすれば、「高齢化に伴う課題を“チャンス”に変える視点」、「国民の高齢期の生活を安心して豊かに“創造”していく視点（策）」が足りない。かつては（2011年）、経済産業省主導のもとで「シルバー・イノベーション（≡高齢者向けの商品サービス開発の推進）」に関する政策が、政府内で議論されていたが、以降、その議論の姿が見えない。医療及び介護に特化したライフ・イノベーションの政策、及び健康長寿を推進する政策に吸収されてしまった可能性もあるが、幅広い領域に散在する多様な高齢期（高齢者）の生活ニーズに照らした場合、市場創造に関する対策の不足感が否めない。

このことは、昨年度、筆者が「高齢社会における選択と集中に関する研究会」（財務省財務総合政策研究所）¹の中でも主張してきたことであるが、やがて人口の3人に1人が65歳以上の高齢者となる本格的な超高齢社会を如何に持続的に成長させることができるか、その中で人生90-100年にも及ぶ可能性のある国民一人ひとりの長寿を如何に豊かなものにできるか、を考えれば考えるほど、高齢期の生活を安心して豊かにする“イノベーション”が必要である。そのキーマンは民間の“産業界”であるとも考える。高齢化最先進国であり最長寿国である日本であるにも関わらず、高齢期の生活充実に焦点を当てた“戦略”がないことは不思議なくらいである。ぜひ高齢期のニーズを今一度広く捉え直した上で、そのニーズに応える“戦略”が打ち立てられ、政策として推進されることを期待したい。

(参考)財務省「高齢社会における選択と集中に関する研究会」で使用したスライド(一部)

～理想の未来を築けるか、いまがその過渡期～

本格的な超高齢・長寿社会は目前に迫っている。
様々な課題は顕在化、潜在化しているが、「真に長寿を喜べる生き方」、
「それを支える社会」に変えていくことが必要。
その中で私たちは何をしていくべきか・・・

2013年 (残り17年) → 2030年

笑顔溢れる未来社会

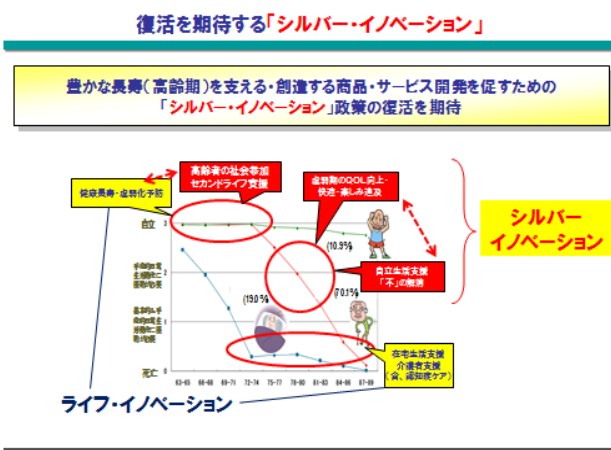
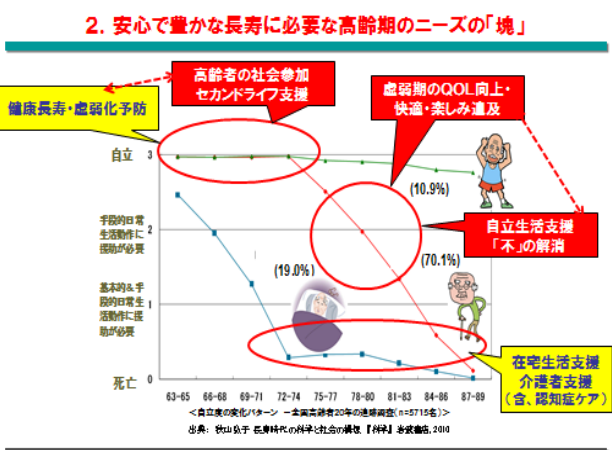
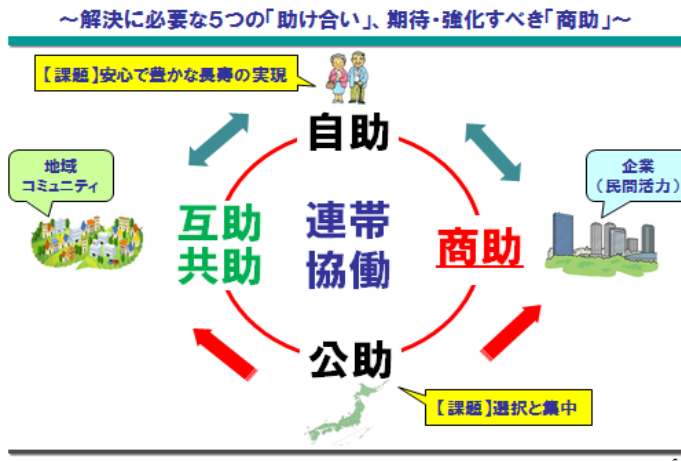
自給大国
難民大国
孤独大国

～高齢化課題解決先進国へ～

様々な高齢化課題が顕在化
しかし、高齢化はグローバルな現象、日本は「高齢化最先進国」
課題⇒チャンス⇒課題解決
⇒「高齢化課題解決先進国」=日本の発展!

- 社会保障費財政の急騰、持続性ある社会保障制度の再構築(社会保障)
- 労働力の減少、国際競争力確保(労働力、GDP)
- 医療、介護の格差問題、量的・質的確保、病院・施設の対応限界(医療・介護)
- 家計のストック化による消費低迷、経済の不活性化(経済)
- 無年金、低年金者への対応、生活保護の増加(年金、生活保護)
- 住宅の老朽化、団地、民間マンションの建替問題(住宅政策)
- 交通システムの再構築、地域全体のバリアフリー化(交通政策)
- 高齢者の閉じこもりと孤独死問題(無縁社会化)
- 地方の過疎化、限界集落化、治安悪化懸念(地方の高齢化)等

⇒高齢化課題は山積、対策が急務



※なお、筆者の考える具体策については、追ってご紹介させていただく予定である。

ⁱ 財務省財務総合政策研究所「高齢社会における選択と集中に関する研究会」(2013年12月～2014年3月)
<https://www.mof.go.jp/pri/research/conference/zk101.htm>